
僕達の憂鬱番長……

どれる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕達の憂鬱番長……

【Nコード】

N2450C

【作者名】

どれる

【あらすじ】

僕達のクラスに居る彼は、皆をやるせない気持ちにさせてくれるのです。彼が居るので、学校がまったく楽しめないので。僕達の青春はこれで良いか……？

高校二年生と言う多感な時期に、僕達のクラスの殆どの人が楽しめないで居ます。それも、全て僕達のクラスに、自称この高校の番長が居るお陰です。

まず、二年生に進級してから三日経ち、このクラスで笑顔を見せる人が居なくなりました。

一週間経ち、このクラスの中で自発的に喋る人が居なくなりました。

二週間経ち、まともな授業が受けられなくなりました。

三週間経ち、このクラスの横家さんが、グラビアアイドルとしてデビューしました。おめでとう……

一ヶ月経ち、担任の神山先生がノイローゼで倒れてしまいました。でも代わりに若い女の先生が来てくれたんです。少しだけ嬉しく思っていました。

二ヶ月経ち、神山先生が結婚したとの報告を受けました。おめでとうございます……案外、元気ですね……

——僕達は唯、一言だけ番長くんに告げただけなんです、怖くて何も出来ません。お陰で、僕達クラスメイト同士は、教室の外でも顔を会わせ辛い様になりました。このままでは、球技大会も学園祭も楽しめません。誰でも良いので助けて下さい……

「あっ」

授業中に、クラスメートの一人が消しゴムを机から落としてしまったのです。

それと同時に番長くんが席を立ち、消しゴムが床に落ちてしまう前に、一直線に走り抜け、気が付けば消しゴムをダイビングキャッ

チしてるんです。

「危なかったな。俺が居たから良かったものの、落としてたらお前……だぜ」

これは、物を落としてしまった人にしか聞こえない様に囁かれるのです。

毎回、何を言われるかは違うんですが、僕の場合は『チョモランマ』と言われました。それよりも番長くんは、素早く動く物に反応するのです。ですので、皆も何事も無かった様に振る舞います。番長くんも周りを注意深く見渡しながら、机や椅子ごと倒された人達には、何も言わず元の場所に戻って来るのです。

「なあ？ 俺、凄かっただろ？

余りの素早さに、ビビっちまったろ？

いや、逆に惚れちまったんだな！ そうだろ！ そう言ってくれ無くても良いっ！

俺は、分かってるから……」

番長くんは、席に戻ると自分の近くに居る人に、必ず同意を求めて来るのです。此処で、番長くんを無視してはいけません。無視をしてしまうと、怒鳴られたり、殴られたり、泣き付かれたりしてしまうのです。

「……うん、そうだね……」

これが、正解です。下手に褒めると、番長くんの自慢話が始まってしまうのです。蔑んだり、哀れんだりしてもいけません。番長くんは、人一倍プライドが高いのです。

「この問題が解る人は、手を上げて下さい」

番長くんは、手を上げながら、先生に指名されてもいないのに、黒板に向かって行きます。

番長くんは、黒板の前に立ち、力強くチョークを押し当て、激しい音と共に何かを書き込むのです。

【愚津梅散出威】

「先生、これなんて読むか解りますか？」

番長くんは漢字が好きなんです。例えば授業に関係が無くても、皆に思い付いた当て字を披露したくて仕方ないのです。

「……先生には、ちょっと理解出来ないなあ……」

番長くんは得意顔で勝ち誇ってしまいました。でも、これで良いのです。

番長くんに、『そんな、言葉は無いよ』と指摘してしまうと、先生が応えてくれるまで、次々と新しい文字を書き足していくのです。

「なあ？ スゲえーべ。」

俺の頭脳、スゲえーべ」

番長くんは、自分は頭が悪いと思われるのが我慢出来ないのです。先生が解らない事を自分は知っている。自分は頭が良い——と思いつく習慣が有るのです。

「……うん、今日も決まってるね……」

番長くんは、頭が良い人の事を、髪形が格好良い人の事だと解釈しているので、これが正しい返事なんです。

「なあ？ お前、武将は誰が好きなんだ？」

番長くんは授業に飽きてくると、近くに居る人に絡んでくるのです。番長くんはアイドルよりも武将が大好きなんです。と言うよりも、番長くんにとって武将はアイドルなんです。

「俺は、本多忠勝と伊達政宗、後は、宮本武蔵とタイガージェットシンが好きかな？」

此処でも、『宮本武蔵は武将じゃないよ』とか『あのサーベル捌きが堪えないよね』と言っては駄目なんです。番長くん基準で面白いか面白くないか判断され、面白くないと判断されると、服を一枚脱ぐとゆう罰ゲームをやらされてしまうのです。

「……そうだね、昨日のテレビ面白かったもんね……」

こう言えば、番長くんは、存在しないテレビ番組に勝手に話を合わせてくれるのです。当然、番長くんはそのテレビを見ていないので、直ぐに静かになってくれます。

昼休み、これはとても危険な時間なんです。番長くんは、主に女の子に声を掛けるんですが、彼女達も必死なんです。

「横家ちゃん。美味しそうだねえ？」

えっ？ 弁当じゃないよ。君の事だよ……」

この返事は慎重にしなければなりません。『ウザイ』とか『キ

モイ』とか罵ってはいけないのです。

「……死んでしまえ……」

残念ながら、これも駄目です。これを言ってしまった横家さんは、しばらく番長くんにつき纏われ、失恋ソングを熱唱されるでしょう。

「……私、アイドルだから、男の人と余り仲良く出来ないんです……そんな事したら、ファンの方達が悲しむから……」

これは言外に『私に人気が出なかったら、お前のせいだぞ』と言っているのです。番長くんは、責任転嫁するのは好きだけど、されるのは嫌いなのです。

一般の人達には使えない技ですが、効果は高いでしょう。基本的には『セクハラ』と言ってあげるのが有効です。番長くんは、裁判沙汰が苦手なのです。

女子に相手をされないと、次は男子の所に来ます。番長くんは、人の食料を集る性癖があるのです。ですので、前の時間に食事は済ませておきます。

学食は駄目です。番長くんは何処までも付いて来るからです。

今日も残す所、後一時間で終わりとなりました。チャイムと同時に凄い勢いで教室に、七三で眼鏡を掛けた先生——神山先生が飛び込んで来ました。

僕達は（何故此処に？）と驚き、そして悲しくなりました。神山先生は、とても真面目な人なので、番長くんの愚行はとても耐えられないと思いました。

神山先生は、教卓を両手で激しく叩き付けましたが、皆は無反応です。これは前にも行った事だからです。

（何を今更？）と僕は神山先生に期待していなかったのですが、神山先生は続けます。

「貴様っ！」

神山先生は番長くんを指差し、力一杯叫びました。先生は叫んだりする人ではなかったのですが、病んでしまわれたのですね？

番長くんも、口をだらしなく開け、啞然としていましたが、神山先生は気にせず続けます。

「……貴様は、この学校の生徒じゃないからっ！」

「「先生！」」

「「せんせー！」」

僕は、一人、また一人と神山先生に抱き付いて行きました。

ありがとう先生！

何だか明日から、学校が楽しくなりそうです！

終わり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2450c/>

僕達の憂鬱番長……

2010年12月28日15時09分発行